

町民らによって雪の中に放り投げられる厄年の男性  
(写真：市民記者 佐々木 健三)



## 奇祭ともいわれる尾花町に伝わる厄払い行事

# 殿上まいり

正月を過ぎると北中山、河和田地区の各町内の神社で盛大に執り行われる「おこない」。

厄年の男衆が餅をまき、厄を払い、

一年の無病息災を祈願する姿は全国的にも珍しい光景だ。

その中でも、河和田地区の尾花町では、

一風変わった「おこない」が今もなお行われている。

その名は『殿上まいり』。

雪の中に厄年の男たちを放り投げることで知られるこの習わしも、

いつから、そしてどうして行われるようになったのかは、あまり知られていない。

この伝統ある行事に興味を抱いた広報さばえ市民記者の二人が密着取材。

町の皆さんと雪深い殿上山を登り、初めて殿上まいりを体験した。



市民記者 佐々木 健三

殿上まいりの準備が前日に行われることを知って、前の日から取材を開始。

町内の皆さんにいろいろ聞いてみました。

### 『前日は男だけで準備』

「殿上まいり」が行われる前日の1月31日朝、尾花町にある山本常雄さん宅の納屋に男衆が集まっていた。およそ60軒ある尾花町では、集落を4班に割り、毎年各班が持ち回りで当日の段取りなどを担当するのが習わしとなっている。今年は2班の順番で、班長の山本さんを中心に翌日に向けて準備が進められていた。

準備は大きく2つ。朝は神社や御神木にかける3本のしめ縄を作り、昼からは餅まきを使う餅をつくという作業だ。



しめ縄は納屋の鴨居に吊し、若い衆3人がひと握りのわら束を持ち、体を時計回りに回転させながら締め上げていきます。

この日は2班の各家から一人ずつが集まり総勢14人、年代はさまざまだが全て男性だ。昔からどの集落の「おこない」でも餅をまくのは男性に限られているのと同様に、準備もまた女人禁制なのだという。

### 『かつての担い手は』

### 『青年団の若者たち』

「およそ二、三十年前までは、他の集落でも、「おこない」の段取りは青年団の若者たちに任されていたんや」と教えてくれたのは、今年63歳になる山崎正照さん。自らも青年団の一員として携わった経験の持ち主だ。「昔は本当に娯楽が少なかった。だから雪が降ると山に登ったり、山で仲間と相撲をとったりと、そんなのが若者の楽しみやたんや。放り投げもこんな感じで始まったんやないかって聞いたことがある。今の人が聞いたらおかしいと思うかもしれんけどな」とも話してくれた。



# 『400年の歴史…』

があるといわれているこの「殿上まいり」。厄年の男性を放り投げて厄を払うことだけが大きく注目されるので、奇祭といわれることも。そのため、放り投げが400年前からあったと思ひ込んでいたことを、山本さんと山崎さんに伝えると「本当のことは誰も分かんよ」と笑って答えてくれた。



おおよそ20kgのもち米を使って奉納用と餅まき用の餅をつきます。米蒸しから丸めまでの作業も全て男性が行います。

## 『地域で守り、伝統は今に受け継がれ』

山崎さんは、「殿上まいりは、どんな吹雪でも、雨が降っても中止にはせんや。で、きんかつたのは、三八豪雪の時ぐらいかな。」と記憶を振り返る。今年で47歳になるという佐々木清明さんも、「自営の人が減って会社勤めの人が多くなつた。今は2月の第一日曜になつたけど、昔は2月5日って決まっていた。小学校は休んで当然やつたし、誰もなんも言わんかつた。村全体でこの行事をやっているという一体感があつた」とも話してくれた。「村には自分の同級生が5人もいた。でも今地元にいるのは自分一人。年下も少ない。この村はどうなるんかなと思つてたけど、今日の準備には二十代、三十代の若い子らが出てきてくれた。年配の人に教えてもらつて嫌な顔せんと楽しそうにやってくれる。ありがたいことや」と目を細めていた。

そうこうしているうちに、時はすでに夕方。前日準備は大方完了し、明日を待つのみ。どんな一日になるのかと気持ちが高ぶる。



20代30代の若い衆が交代で先頭に立ち、「かんじき」を履いて1m以上も積もった雪を踏み固めながら登っていきます。



担いできた3本のしめ縄のうち1本は途中笠掛松といわれる場所にある御神木へ奉納。

年長者に「かんじき」の履き方を教えてもらう若い衆。

時折、吹雪となったこの日。体を温めてくれるたき火の暖は本当にありがたい。参加者は炎に手をかざして、ほっこりとした雰囲気。



## 尾花町の人々の輪、絆の大切さを痛感

市民記者 土田 泰嗣

河和田で作られた越前塗山車に蒔絵で描かれていた「殿上まいり」を見たときから、伝統文化好きで奇祭好きな私は、自分の目と肌でその空間を感じたいと思っていました。

そして今回、市民記者として初めて参加し、とてもワクワクすることができました。雪深い殿上山の斜面をガブリガブリ登り、山上にある禪定神社で、厄年の人たちを放り投げる行事が行われていることには本当に驚かされました。それと同時に、尾花町という小さな集落の人々が途絶えることなく代々この神事を受け継いできたこと、そして、炎を囲み、昼食を互いにお裾分けし合いながら雪の中で談笑し合う光景には、地域がつながり合っている本当のコミュニケーションの大切さを感じました。



この日は小学生の子どもたちもたくさん参加していました。厄年の男性がまいた餅を拾った親子。たくさん拾えたかな？